

## 同志社に学んだ

### 三人の朝鮮人詩人

わたしは戦前の同志社に学んだ朝鮮の詩人たち、吳相淳、鄭芝溶、尹東柱について、簡単に紹介してみたいと思う。

これらの詩人は日本ではあまり知られていないが、朝鮮では朝鮮近代詩壇の秀れた創始者ないし形成者としてよく知られている。これら三人の詩人は、日本の苛酷な植民地時代に主として活躍したが、その生き方はそれぞれ異なっており、ともに苦渋にみちた精神遍歴をたどっている。しかし三人とも、祖国と民族の解放、民族文化の向上のために刻苦奮闘した点ではかわらなかつた。

ところで、彼らは植民統合下の朝鮮から、どのような想いを抱いて、京都同志社にまで



### 宇治郷 毅

留学し、その青春の一時代を過ごしたのであるか。当時の朝鮮青年の多くが東京へ留学していったのは違って、彼らは京都同志社を自ら選んで入学してきたのであった。わたしには、これは偶然のこととは思われない。これら三人の詩人は、その若き日にキリスト教の影響を強く受け、同志社に何かひかれるものがあつたのだと思われる。

彼らの同志社時代の生活はあまり知られていないが、その心境を察するに、けつして青雲の志を抱いた立身出世のための留学ではなく、孤独と苦悶にみちたものであつたと思われる。かたときも奪われた祖国のことは彼らの胸裡を去ることなく、ただ黙々と勉学にい

そしただように思われる。はたして同志社の教育は、彼らの孤独な魂にふれるものであつたであろうか。魯迅が仙台医学専門学校で出会った藤野先生のような良き師に、彼らは同志社でめぐり会うことができたであろうか。わたしがこれら詩人たちのことを考えるとき、いつもとらわれるのはこのような想いである。

### (1) 吳相淳

一八九四年、ソウルに生まれる。於義洞学校、徽新学校に学ぶ。少年時代の彼は、「おとなしく静かな性格の持主であつたが、時おり出入りしたYMCAで新知識に熱中し、ついに一九一二年、十八歳の時、家族に何も言わず、飄然と日本へ渡つて行つた」という。京都同志社大学神学部選科に入学し、宗教哲学を専攻する。一九一七年、卒業。

帰国後、熱烈なキリスト教伝道師となる。また一時、普成高普の教員となる。

一九二〇年、文芸誌『廢墟』の同人として文壇にデビューし、「空超」と号した。初期の彼は詩、評論、隨筆に多彩な活躍を示した。とくにその詩は、朝鮮の近代詩に雄壯な

思想性をもたらしたものと、高く評価されている。草創期詩壇の先駆者となつた。しかし、三・一独立運動挫折後の苛酷な植民地朝鮮に出発した彼は、その後、屈折し、苦渋にみちた精神遍歴をたどっている。当時の苦悶にみちた朝鮮の現実（彼はそれを廢墟とよぶ）をうたった彼の詩一編を紹介する。

廢墟の祭壇

日が沈む

廢墟の上に

無心に

日が沈む

息あらく

血もさわぐ

殉難の痛み

共にうける白い服の群たち……

口をとじて

目をとじて

廢墟の祭壇の下にひれふせば

心臓がなっている

あたかも世界がこわれてしまふように

彼の呻吟を聞け。

一九二四年

彼は一時、思想犯として投獄されていたこともあつたが、一九三〇年、仏教中央学林（現在の東国大学の教員となる。その頃、キリスト教から仏教に改宗する。全国の寺院を転々としながら、仏教思想の研究に没頭した。その後還俗して、死ぬまで放浪生活を続け、一生を独身で過ごした。

解放後、再び詩作を始める。一処不住の放浪生活はかわらなかつたが、その世俗を超越した生活態度と文学に対するかわらぬ愛情によって、文壇的には優遇された。一九五四年、芸術院の終身会員となり、芸術院賞、ソウル市文化賞を受け、韓国詩壇の重鎮となつた。晩年の彼は、毎日ソウルの繁華街明洞の喫茶店で時を過ごし、詩とタバコを愛好する街の詩人として人々に愛された。一九六三年に逝去。遺稿集に『空超吳相淳詩集』がある。

### (2) 鄭芝溶

一九〇三年、忠清北道沃川に生まれる。ソウルの徽文高等普通学校に学ぶ。一九二六

年、同志社大学予科卒業。一九二九年、大学英语科を卒業した。在学中の一九二六年頃より詩作に専念する。

帰国後、母校の徽文高普で教鞭をとる。かたわらカトリック教信者として、『カトリック青年』という雑誌の編集顧問をつとめた。李箱、朴木月など多くの俊才を詩壇に送りだし、後輩の育成につとめた功績は大きい。

彼は一九三〇年、詩誌『詩文学』同人として詩壇にデビューしたが、すぐ「九人会」という純文学運動グループに参加した。この純文学運動は、当時のプロレタリア文学運動とは正反対に位置するものであつた。彼の詩風は英国のT・E・ヒュームのイマジズム詩の影響を受けており、朝鮮近代詩の一つの頂点を形成したものと高く評価されている。京都留学時代の彼の心情をうたった次のような詩がある。

### 京都鴨川

鴨川十里の河原に

日が暮れる……暮れる……

日ごと君を想いやり

のども洶れはてた……

早瀬のせせらぎ……  
冷たい砂を握りしめる一人の男の心、  
握りしめ、粉ごなにしても、  
わたしの心は静まらない。

多年草のおい茂ったところ  
川蟬が一羽棲みつつき、鳴いている。  
一つがいの燕が飛び立った、  
まるで雨にうたれて踊りをおどっているよ  
うだ。

西瓜のにおいをはこぶ夕べの水上の風。  
オレンジの皮を噛むような  
若い旅人の憂愁、  
鴨川十里の河原に  
日が暮れる……暮れる……

一九三五年、彼は処女詩集『鄭芝濬詩集』  
を、さらに一九四一年、鄭芝濬詩の精神を結  
集した『白鹿潭』を出版した。そして、日帝  
末期には沈黙を守った。

解放後、梨花女子専門学校（現在の梨花女子  
大）の教員となる。その頃、『鄭芝濬詩選』  
をはじめ紀行随筆集や文学概論の著書を出版  
し、活動を再開した。しかし、この頃より朝

暮れかかる空の下  
静かに流しもしましよう。

一九四一年

尹東注は一九四二年四月太平洋戦争下の日  
本へ渡り、立教大学英文科選科に入学する。  
東京時代の彼はひたすら勉学と詩作に励む。  
その年九月、京都へ移り、同志社大学英文科  
選科に入学する。在学中、反日的な文学活動  
とハンゲル運動を行う。

一九四三年七月、抗日運動の思想犯とし  
て、京都鴨川署に逮捕される。治安維持法違  
反であった。一九四五年二月、祖国解放を目  
前に二十九歳の若さで福岡刑務所で獄死し  
た。（二説では毒殺されたという。）

同志社では一九四八年十二月中退となって  
いる。おそらく彼の死後、朝鮮の関係者が退  
学届を出したのではないかと思われる。彼の  
母校延世大学では、一九六八年に彼の殉国を  
追慕して、校庭に記念碑を建てている。（なお  
尹東柱については、拙文「抵抗の詩人、尹東柱」雑誌  
『またん』二号を参照されたい。）

（昭和四十一年大法官、同四十三年  
大院修了、国立国会図書館司書）

鮮文学者同盟機関誌『文学』に關係し、強い  
社会性を示すようになった。金九など上海臨  
時政府要人の帰国歓迎メッセージ詩などを書  
いている。朝鮮戦争後、朝鮮民主主義人民共  
和国へ行った。

(3) 尹東柱

一九一七年、「満州」北間島明東で生まれ  
る。本籍は咸鏡北道清津。彼は「満州」開拓  
民の子孫であった。抗日運動の拠点である北  
間島で少年時代を過ごした。龍井の恩真中  
学、平壤の崇実中学校に学ぶ。崇実中学時  
代、神社参拝問題（日本が朝鮮人に神社参拝を強  
制したことに対する反対運動）で日本の植民地支  
配の矛盾を痛感した。一九三六年頃より童詩  
を雑誌に発表しはじめる。

一九三八年、ソウルの延禧専門学校（現在の  
延世大学）文科に入学する。この在学中に、朝  
鮮語授業の廃止、「創氏改名」（強制的に朝鮮名  
を日本式姓名にかえさせること——尹東柱も平沼東柱  
と改名する）を体験し、抗日民族詩人となった。  
朝鮮文学の研究をすすめ、『朝鮮日報』に散文  
を発表したりする。また、この延世卒業時に自  
選詩集『空と風と星と詩』を書きあげた。出

版しようとするが、反日的なハンゲル朝鮮文  
字詩集であったため、出版できなかった。  
この詩集は祖国愛と人間愛にみちあふれたす  
ばらしい抒情詩集である。これは、一九五五  
年に彼の遺稿集としてソウルで出版された。  
彼の詩精神の根本には、キリスト教的ヒュ  
ーマニズムと殉教精神のあつい血潮がながれ  
ている。次に延世時代の詩一編を紹介する。

十字架

追っかけてきた日の光なのに  
今は教会堂のてっぺん  
十字架にひっかかっているのです。  
尖塔があんなにも高いのに  
どうやって登れたのでしょうか。  
鐘の音も聞こえてこない  
口笛でも吹いてそらをさまよう、  
つかれはてた男にも、  
幸福なイエス・キリストのように  
十字架が許されるならば  
首うなだれて  
花びらのように咲きこぼれる血を

同志社関係出版物

新島 襄（岡本清一著）	同志社大学出版部	¥ 300
新島 襄（魚木忠一著）	〃	¥ 300
同志社—その80年の歩み—（同志社大学総務課編）	〃	¥ 100
一私学の歩み（上）（編者代表・秦孝治郎）	〃	¥ 130
ミルトン研究（越智文雄著）	〃	¥ 800
同志社設立の始末 同志社大学設立の旨意（新島 襄）	学校法人同志社	¥ 100
同志社90年小史（同志社々史料編集所編）	〃	¥3,000
同志社歌集（同志社歌集編集委員会編）	〃	¥ 150
新島襄書簡集（編者代表・住谷悦治）	岩波書店	¥ 210
同志社大学 一大学シリーズ（奥村芳太郎編）	毎日新聞社	¥1,000
My Younger Days（新島 襄）	同志社校友会	¥ 100

取扱・同志社収益事業課

# 環境としての科学技術

— エリユルの技術論にももう —

島尾永康

高度成長を謳歌していたころには、はなやかな技術革新論ばかり目につき、公害が社会の注目を浴びている昨今では公害論がおびただしい。石油危機と前後して成長と資源の限界がさかんに論議されるようになった。日本の技術論は、日本の社会を反映して、まことに目まぐるしい。目先の話題ばかり追っているかにみえる。そこへゆくとヨーロッパの技術論には、歴史的な展望にたつて、じっくりと技術の本質と取組むものが多いように思われる。たとえば、日本にあまり知られていないジャック・エリユルである。

普通の技術論でとりあげられる技術は、生産技術と流通技術

の間に明確な境界はない、というのがエリユルの見解であつて、他の人が科学というところもすべて技術とみなしている。実験室における研究者の大多数は、実は技術者であるという指摘などは、うがっている。そこでエリユルは、合理的に到達された諸方法、絶対的効率をもつ諸方法を技術と定義する。したがつて、技術は生産活動だけでなく、人間のあらゆる活動に及ぶことになり、われわれの文明は技術文明、われわれは科学技術という環境の真只中にあることになる。

ではこのような技術的環境という状況は、いつから発生したのであるか。伝統社会での技術現象は現代社会でのそれと連続するのであるか。連続するという立場からいえば、石器時代に技術革新がなかったように、現代にもとくにそのようなものはない。あるいはまた、現代人にとっての原水爆の恐怖は、原始人が初めて青銅の剣に接したときの恐怖と異なるものではなく、人類は青銅の剣によって滅びなかったように、原水爆によつても滅びないであろうということになる。連続しないという立場からいえば、過去の技術現象とは全く異質の技術現象が現代におこっているとする。エリユルは後者の立場にたつた。これが第二の特色である。

伝統社会の技術現象は次のように分析される。第一、技術はごく限られた範囲にしか適用されなかった。しかも過去にさか上れば上るほど、技術的要素は少なくなり、ついには魔術のなかに姿を没する。それほどの過去でなくとも、たとえば、ニュージーランドで Bee とよばれた「寄合ひ」は、本来は技術

を出ないが、エリユルは技術をこれらに限らず、きわめて広く解釈しているのが第一の特色である。かれは、機械を中心とする通常の生産技術は自明のこととして、しばらくこれをおき、むしろ経済技術、組織技術、人間技術を重点的に論じる。組織技術には、国家・行政・警察・司法・戦争などの技術が含まれ、人間技術には、医学・心理学・教育・プロパガンダなど、人間を対象とする技術が含まれる。つまり大学の学部でいえば、技術を学び研究するところは、工学部だけではなくて、経・法・文・医などあらゆる学部はすべて技術を研究し習得する場所ということになる。それでは科学はどうか。現代では科学と技術

的な目的をもっていたのであろうが、それは一年中で最も楽しい時をもつための口実でしかなかった。技術的な面は二次的なものにとどまった。伝統社会においては、生産も消費もさやかなもので満足していた。人間はその生活のごく一部分しか技術にあてず、人間の運命は、まだ技術と結びつけられてはいなかった。

第二、技術的手段も制約されていた。人は自分のもっている手段を、その極限まで利用する傾向があつた。古い手段が有効であるかぎり、これを他の手段でおきかえようとはしなかった。道具の欠点は、労働者の熟練で補われることになつていった。新しい道具の探求はおこなわれず、使い方の完璧さ、適用の器用さの探求だけがおこなわれた。

第三、技術現象は局所的だった。技術の伝播はほとんどなく、あつてもきわめて遅かった。技術はそれを生みだした文化の刻印をおされており、その枠組の中に閉じこめられたままだった。技術がくみこまれていた社会が普遍的でなかったように、技術もまた普遍的にならなかつた。

伝統社会においては、技術の発達が遅かつたために、人間は技術の進歩におくられることなく、その用途を制御できた。もし望むなら、人間は技術の影響から容易に脱却することもできた。

このような伝統技術とは異質のものとなる現代の技術現象は、次のような特質をもつ。第一、先行する技術が自動的に後続する技術を選択する。技術が二つある場合、どちらを選ぶか

は技術自身が自動的に決定し、人間はもはやいかなる意味でも選択の主体ではない。これがエリユルのいわば変奏主題であって、くりかえし現われる。人間は技術の影響や結果を記録する器具でしかない。技術の領域では、さまざまな方法、機械装置、組織、公式などの選択は、技術自体によって自動的にこなされる。技術の領域外では、技術はすべての非技術的活動を自動的に排除する、もしくはそれを技術的活動に変えてしまう。個人も集団も技術以外の道をとることはできない。

第二、技術はひとりでに増大する。これは二つの法則に定式化される。(1)特定の文明の中では、技術の進歩は不可逆的である。(2)技術の進歩は、算術級数によってではなく、幾何級数によっておこる傾向がある。これは一つの分野での発見が、他のさまざまな分野に反響をよびおこし、新しい技術を生じることである。たとえば、コミュニケーション技術、心理学的技術、商業技術、強権的政府の技術などの総合からプロバガンダ技術が生じるとする。ここでもエリユルは、技術がひとりでに増大するのであって、人間は何らの役割をもたない、と例の変奏主題をくりかえす。技術が生産するものはすべて生産されて消費者に受け入れられねばならず、人間が生産を支配していると信じるのは妄想である。技術はその触れるものすべてを変え、しかもそれ自体は触れられない。

第三、技術現象は、個々の諸技術をすべて包括して、一個の単一で不可分な全体を形成している。この複合体を否定して、特定の技術を一つだけ取り出すことはできない。技術現象は、ミニコミュニケーション手段も、人間の手にかければ一〇パーセントは間違い電話となる。技術の自律の前に人間の自律はありえない。技術はまた人間社会における、あらゆる神聖なるもの、神秘的なものを否定する。しかし人間は本来、神聖なるものなしにはいられない。そこで神聖なるものを打破した当の技術自体が、新たな神聖となり神聖なるものとなる。

以上がエリユルの技術論の要約である。本来、人間のいとなみであるべき技術が、いまや人間をはなれて独り歩きをし、人間は無用な付属物でしかない、という痛烈なアンチテーゼをのべたエリユルとは、どのような人であろうか。かれは一九二二年ボルドー生まれ、ボルドー大学教授、法制史専攻。自伝的文章によれば、家庭が貧しかったため一六歳から自活した。一九歳のときマルクスの『資本論』を読み、そこにかねてより抱いていたすべての疑問にたいする答を見出したと感じ、マルクス主義に打込んだ。しかし共産党には失望して、加入しなかった。二二歳のとき聖書を読み、激しい回心を体験した。以来マルクス主義者であるとともにキリスト者でもあることができるか、ということが最大の課題となった。技術の問題を考え始めたのは一九三五年以来であり、技術こそ最も重要な社会学の現象であり、そこから出発して他のすべてを理解する必要があると確信するにいたった。エリユルにおいて、神学と聖書の研究と、西欧の技術社会の社会学的分析とは表裏一体をなしている。かれの技術論研究にたいする応答は、神学的著作に暗示的に見出すことができ、逆にかれの神学は社会的政治的経験によ

よいものをとり悪いものを排除するといった工合に、バラバラにできるものではない。しかもすべての技術は、必要のいかにかわらず利用される傾向にある。麻酔剤の使用以来、不必要な手術がふえた。

第四、現代技術は普遍的である。文明の程度いかんにかかわらず、すべての国々で同じ技術が適用され、同じ影響が生じている。かつてはそれぞれ個性的な文明原理に支配されていたのが、今では一律に技術的原理によって統一される。技術は社会的形態を分解し、倫理の枠組を壊し、社会や宗教のタブーを打破し、社会共同体を個人という原子にまで粉碎する。このような技術の地理的な、いわばヨコの普遍性について、人間存在の深みにまで浸透するタテの普遍性も考えられる。生・死・休養・娯楽、人間にかかわるすべては技術によって浸透されている。決断を下すという最も個性的、自発的領域にまでオペレーション・リサーチの技術が入りこむ。いまや人間存在の本質そのものが問われている。

第五、技術は自律的である。技術が第一動者であり、社会的、政治的、経済的变化を条件づける。技術は善悪の彼岸にある。したがって、何でもしたいことができ、人間とは無関係にわが道をゆく。人間は自動販売機に入れるコインに似ている。操作を始動するがそれに参与しない。人間が自由であるとき、いかなる技術も可能でない。人間の自由と気まぐれとは技術の自律と矛盾する。したがって技術は、ますます人間を排除する方向に進む。人間は誤謬の源泉であるからだ。電話という精巧なコ

つてつちかわれた。第二次大戦中、終戦までの五年間、対独レジスタンス運動に参加し、戦後は五年間ほどボルドー市助役をつとめたというから、たんなる書齋派学究ではない。フランス改革派教会に属し、現に世界教会協議会委員でもある。政治、経済、社会の諸問題の解釈においてマルクスから学んだことはたしかであろうが、その技術論には教条的公式主義は見当らない。一方、神学的解釈の片鱗さえもない。体系的であることをきらい、かれのいわゆる「走り書き」的論述によって、一つの立場を批判したかと思うと、またその対立見解を批判してゆくといった弁証法的手法を駆使して甚だ多弁、とどまるところを知らない。

従来の技術史は機械の歴史を出ない、とエリユルは指摘する。たしかに理工学のみならず、人文・社会科学のあらゆるソフト・ウェアを含めての技術の総体的研究はこれまでにない。しかしこのような視点に立ってはじめ、われわれが科学技術的環境にひたっていることがわかる。人間は技術を使っているつもりだが、実は技術がひとりでに機能しているというアンチテーゼをかいたエリユルは、人間の主体性の回復を絶望しているのであろうか。技術的決定論は克服できないとみているのだろうか。一見、悲観的とも絶望的ともみえる言辭で、エリユルは現代技術の本性を読者に覚醒させようとする。かつてのレジスタンスの戦士は、いまや人間性を疎外する圧倒的な技術現象に立ち向かっているかみえる。

# クラーク記念館設計図

竹内力雄



ぶ長尺の卷子仕立、絹布に墨で見事な設計図が十三面引かれており、卷子表装の裏面にはクラーク記念館建築の由来と献堂式次第、工事関係者の名を詳細に記してある。

\* \* \*

『此表面図ハ米國ブルクリン府バイロンダブリウクラーク夫人が一昨年一月死去せる其子の記念として設立すべき「バイロンストーンクラーク」神学館の爲め日本京都同志社ヘ米金壹万壹千五百弗の寄附を爲せしにつき東京明治学院ランデス氏の紹介により独乙人セール氏をして作らしめたる該館建築の設計図なり明治二十五年七月地盤固めに着手し同十一月四日定礎式を行ふ同日ハ日本基督伝導会社長海老名弾正氏演説をなし同志社教授エム、エル、ゴルドン氏祈禱を捧げ同志社々長小崎弘道氏礎石を置くことを司る

明治二十六年九月に至り略ぼ工事落成を告げしを以て同月十九日より該館内におひて本

明治八年の開学以来九十九年、さまざまな校舎が建てられ、中には姿を消さざるを得なかつたものもあつたが、幸い明治の煉瓦造の建物は今に残り、同志社のキャンパスにその歴史を示し、学園らしい落ち着きを与えている。礼拝堂(チャペル)、クラーク記念館、彰栄館、有終館、理科学館などがそれである。なかでも、礼拝堂が国の重要文化財に指定されたのは昭和三十八年七月のことであつたが、当時同志社はチャペルの他に彰栄館とクラーク記念館(旧神学館)も同時に国の文化財保護委員会(当時、法改正により現在の指定権者は文部大臣)に指定の申請をしたのであつた。結果、

チャペルはご存知のように、日本のプロテスタント派煉瓦造礼拝堂の中では最も古く代表的なものであり、説教台、椅子、ベンチも創建当時のままであることなどの故に重文に指定されたが、彰栄館とクラーク記念館は指定基準を充たさなかつたようである。

ところで最近、同志社女子大学デントン記念館屋上の化粧屋根下の物置に使われている部分からクラーク記念館の設計図がでてきたのである。従来から設計者は東京に住むドイツ人ゼールと伝わっていたが、まさしくその署名が在る。

設計図は幅45センチ、長さ3メートルに及

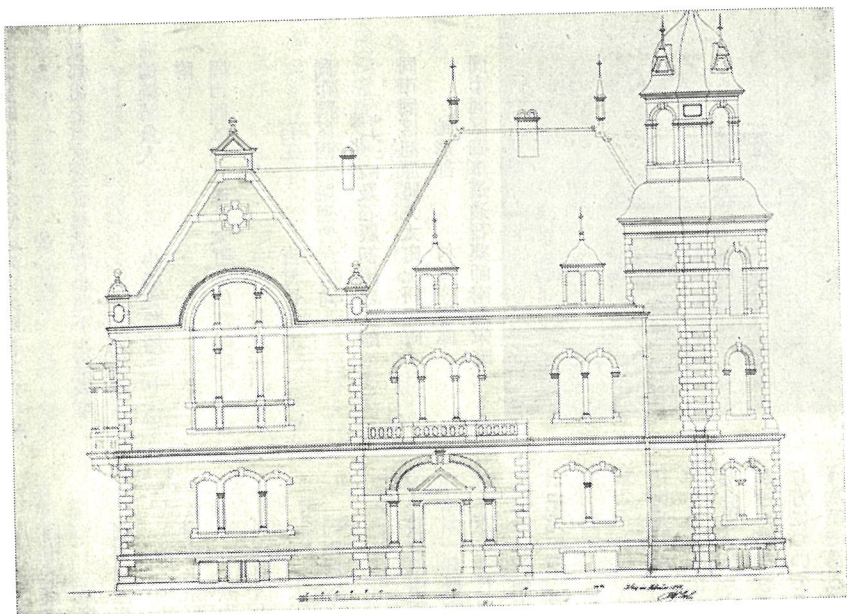
科、別科両神学生の授業を始めた

明治廿七年一月三十日午後一時ヨリ同志社公会堂におひて右開館式を執行し校長代理市原盛宏氏を司り教授松山高吉氏聖書を朗読し同ジェー、デー、デビス氏献堂の祈禱を捧げ社員湯浅治郎氏本館建設の報告を為し教授デ、イ、アルブレクト社員宮川経輝両氏の演説あり次に教授デ、ダブリウ、ラルネット氏の祝詞を以此会を終りたり当日来会者満堂立錫の地を餘さず右式終りて館内を縦覧せしめ同日午後六時より再び神学館内にて賓主相混して懇話会を開けり席上大阪島の内教会牧師古木寅三郎、神戸多聞教会牧師長田時行京都四條教会牧師村田勤、同志社教授森田久万人等諸氏の

感話あり当夕の来会者ハ二百余名とす

該館建築委員ハ同志社社長小崎弘道、教授ジェー、デー、デビス、社員中村栄助、同湯浅治郎の四氏にして建築請負人及び該館礎石中に封鎖せる鉛函中に納めし物品目録ハ左の如し

- 一 聖書
- 一 米人クラーク氏寄附金の始末及び建築の事
- 一 日本伝道会社の統計表
- 一 組合教会一覽表
- 一 同志社設立の始末
- 一 同志社大学設立の旨意
- 一 同志社明治廿四年度報告
- 一 同志社明治廿四年より同廿五年に至る統計記
- 一 同志社各学校規則書
- 一 同志社々員姓名録
- 一 同志社教員職員姓名録
- 一 同志社各学校生徒計算表
- 一 六合雜誌
- 一 基督教新聞
- 一 国民新聞
- 一 同志社文学雜誌



一故総長新島襄氏の伝(デビス氏著)

左官方 萩原善兵衛

同市下京区大仏瓦町五番戸

京都市上京区室町通武者小路下ル福長町

六番戸

右建築請負人 小嶋佐兵衛

附

同市同区寺町通丸太町上信富町町

廿三番戸

石工 吉村竹治郎

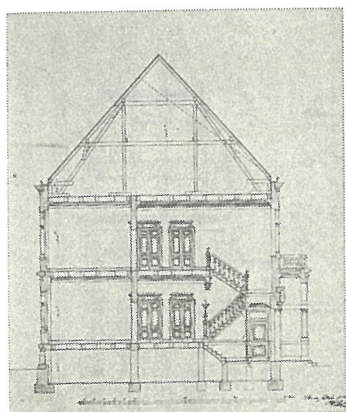
同市同区西洞院通竹屋町角

煉化石及石灰初田岩三郎

同市同区河原町丸太町上研屋町

セメント 村岡豊吉郎

地形部 同市同区御車道通石薬師南入栄町



同市下京区大仏瓦町五番戸

屋根瓦方 田中卯兵衛

同市同区東高瀬正面南入

手伝方 片岡政治郎

同市上京区西堀川通出水北入

鉄物商 生田源右衛門

同市同区小川通竹屋町北入中之町

大工方 浦田 佐助

同市同区上長者町通松屋町西入高台院町

屋根 長沢平次郎

滋賀県甲賀郡土山村大字瀬音

土居 加藤惣太郎

財木方

明治廿七年十一月三十日

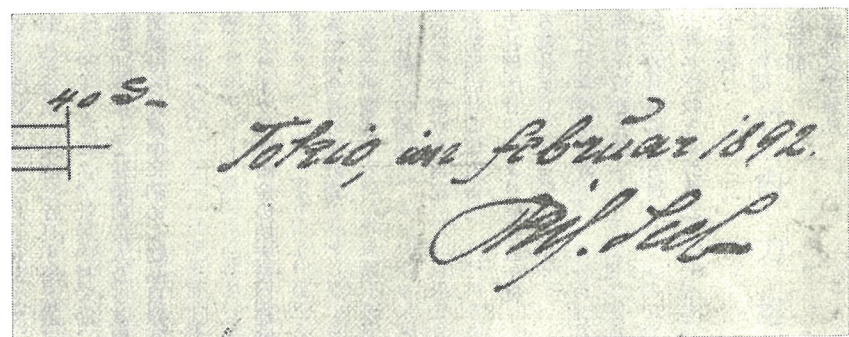
記之

紀元一千八百九十四年

同志社 團

\* \* \*

このように、貴重な設計図が出てきたこの機会に、かつて同志社から重文指定へと働きかけた事実をふまえて、クラーク記念館の在り方について考えてみてはどうだろうかと思う次第である。クラーク記念館の二階にはか



って礼拝堂があったが、今は仮天井を張って二つの教室として使われている。これはあくまで臨時のもので、将来は復元する計画で昭和三十八年にそのようにしたと聞く。約一年後に同志社は百周年を迎えようとして、さまざまな記念事業が考えられようとしている。そこで、クラーク記念館を新島襄資料を含めて同志社の歴史的史料の常設展示の場として活用し、さまざまな史料を通じて新島先生について、また同志社について考え、思いをいたす原点としてはどうだろうかということである。

ところで、新島資料となると、同志社の歴史的建造物の一つでもある新島旧邸がある。明治初期の工夫をこらした和洋折衷住居として、大きな写真集に取り上げられたりして脚光を浴びているが、一歩中に入ってみると、畳のいたみはひどく、応接間の軸物等のいたみもはげしい。見学に来られた人に対しても申し訳ないような状況である。新島先生なき後、八重子夫人が部屋を区切って茶室をしつらえ、茶を楽しんでおられたが、この茶室は西本願寺の組立茶室「螢の茶屋」を模したものとこのことで、その銘額「寂中庵」は今の裏

千家の先々代の筆になるもので、茶の世界では今では仲々のものごとである。(これは粗末な針金で茶室にかけられていたが、表装し直し、文字は板類にして掲げるべく準備中である。)それに旧邸書齋の新島先生手沢の図書類の防火管理等についても考えなければならぬと思われる。旧邸見学希望者を現在は内部に入ってもらっているが、それならばそれで同志社として旧邸オープン目的を設定し、組織的な展示やそれに必要な管理体制を取らなければならないだろうし、年に何回かは一般の方にも周知して、開放し、新島先生を考えてもらうよすがとすることも考えてみなければならぬように思われる。管理上、内部に入ってもらわないのならそのような措置も必要であろう。

以上クラーク記念館の設計図が出てきたことに寄せて、同志社の歴史的な建造物の二つについて若干現状に触れて思いを述べさせていただいた次第である。(社史料編集所職員)

(後記) 「寂中庵」の板額は裏千家の御好意にて、古色をつけて立派にでき上がり、社史料編集所にて保管していることを御報告させていただきます。

### 新島襄研究参考図書

- My Younger Days 同志社校友会
- 新島先生書簡集(森中章光編) 同志社校友会
- 新島先生書簡集一統(森中章光編) 同志社校友会
- 新島襄書簡集(同志社編) 同志社校友会
- 新島先生(徳富蘇峰著) 同志社出版部
- 新島襄一人と思想(魚木忠一著) 同志社出版部
- 新島襄(岡本清一著) 同志社出版部
- 新島先生と徳富蘇峰(森中章光著) 同志社
- 同志社九十年小史 (同志社々々料編集所編) 同志社
- 雑誌「新島研究」 同志社
- 新島襄(和田洋一著) 同志社
- 日本基督教団出版局

※比較的参照しやすいものを掲載